レナテ　——　自慰癖に対する治療法

ｆｅｍｃｉｒｃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
レナテ　――　自慰癖に対する治療法

【Ｎコード】
Ｎ３４２８ＢＺ

【作者名】
ｆｅｍｃｉｒｃ

【あらすじ】
勉学に励まず、自慰行為に耽る女子高生に対する処罰的な割礼手術。

プロローグ

この手記は、婦人科医である私の実体験に基づいて執筆したものであり、外科手術など、写実的に記述した箇所がある。したがって、繊細な神経を持つ者は決して読まないよう、あらかじめ警告しておく。また、関係者の人権擁護のため、登場する人物や場所は架空のものに変更してあることをお断りしておく。

一九六〇年代の半ば、私はウィーン市内で婦人科クリニックを営んでいた。私の行う治療の評判は上々で、毎日、多くの患者がクリニックを訪れていた。

その評判の良さは、私が女性の性欲異常亢進症と常習的な自慰癖を治療する特別な手術を行っていたという事実に基づく。しかしながら、臨床例を添付した論文を婦人科医学会に何度か送ったにもかかわらず、その治療法は公的にはまったく認められていなかった。

プロローグ（後書き）

　この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は今は亡き　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ グループに投稿された　Ｍａｃｒｏｗ　氏による、„Ｒｅｎａｔｅ　ｏｄｅｒ　ｗｉｅ　ｅｉｎｅ　Ｍａｓｔｕｒｂａｎｔｉｎ　ｇｅｈｅｉｌｔ　ｗｕｒｄｅ“です。タイトルの『レナテ　――　自慰癖に対する治療法』は原作タイトルのほぼ直訳です。やや長めではあるのですが、この話に関しては直訳のタイトルでＯＫと思い、あまり頭を捻りませんでした。原作のタイトルからもわかる思いますが、この話は英語ではなくドイツ語で書かれていたものです。

　じつは、訳者は英語も含めて、外国語の読み書きはほとんどできません。ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説の翻訳は、もっぱら機械翻訳に頼っています。複数の翻訳エンジンを駆使し、文意が正しく通る結果を寄せ集めて日本語の文章にしています。また、通常の翻訳エンジンで翻訳されない特殊な単語や口語的な言い回しは英語辞書サイトのアルクで調べたりもしています。さらに、それでも不明な単語は　Ｇｏｏｇｌｅ　の画像検索のお世話になって、実物の写真を見て意味を解釈しています。

　それで、その機械翻訳ですが、英語に関しては、ずいぶんと前から、そこそこの精度があったのですが、ドイツ語に関しては複数の翻訳結果から文意を読み解くことさえも困難なレベルでした。そのせいで、このドイツ語の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説の翻訳が滞っていたわけなのですが、最近、ようやく、ドイツ語の機械翻訳の精度が文意を読み解けるレベルに達してきました。そこで一気に翻訳を進めた次第です。

　このストーリーも訳者の好むメディカル系の割礼手術を題材とし

たものであり、翻訳作業を早く終えたいと思っていた作品でしたので、ようやく肩の荷が下りた気分です――とは言っても、メディカル系の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説はまだまだたくさんあり、その中には長いストーリーもあるので、根気よく、少しずつ翻訳を進めていきたいと思っています。乞う、ご期待というところです！

レナテの割礼（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

レナテの割礼

五月のある日、学生時代の悪友が十八歳になる姪を連れて、私のクリニックを訪問した。クリニックの受付嬢であるアニータに導かれ、二人の男女が診察室へ入ってきた。私の古い友人と彼の姪——レナテだった。

友人の話によると、彼の姪——レナテは学業成績があまり良くないにもかかわらず、期末試験の勉強もせずに夜な夜な少年たちと街中をドライブしていたとのことだった。彼は遊び惚ける姪を叱りつけ、二度と勉強をおろそかにしないという約束をさせた。さらに留年という不名誉を免れさせるためなら、どのような手段をも講じると、彼女に警告したそうだ。

しかし、レナテは生活態度を改めてるどころか、ますます傍若無人となり、とうとう、自室で自慰に耽っているところを母親に見咎められたとのことだ。それまでも、彼女は伯母のバイブレーターを持ち出して、その電動刺激で何度もオルガスムに浸っていたらしい。

レナテの問診を行った私は、その十代の娘が、いかに生意気で厚顔無恥であるかを十分に確認することができた。彼女の常習的な自慰癖に対する治療のためには、今すぐにでも特別な手術を施さなければならないと即断した。

アニータがレナテを隣の手術準備室へ連れていった後、私は友人と久しぶりの再会を喜び合い、彼の大好物であるコニャックを振る舞った。そして、レナテに対する治療法やその具体的な手順、その効用など、すべてを詳細に語って聞かせた。最後に、カーテンによって隠されている棚の前へと誘った。

そこにずらりと並べられている瓶の中は保存液で満たされており、外科手術によって摘出した患者の器官を納めてあった。瓶のすべてにラベルが貼れていて、それには三桁の番号が記載されていた。そ

の番号は手術中に撮影した写真や手術後に描いた図解などによって患者の治療過程を記録したバインダーの番号と対応していた――私の古い友人は、そのコレクションを見て、とても感銘を受けたようだった。

手術準備室から戻ってきたレナテは、私たちに魅力的な体を晒していた。手術を受けるための服はナイロン製のスリップのようなものだったが、乳首の状態を十分に観察することができるよう、ブラカップ部分が上部から三分の二ほどカットされていたのだ。

レナテを診察台に座らせると、両腕を上方へ引き伸ばし、それから、太腿を大きく広げ、四肢のすべてを革ベルトで完全に固縛した。さらに手術の最中、痙攣を起こしても下腹部が動くことがないよう、腹部にも幅広の革ベルトを回し、しっかりと締めた。

その処置を行っている間、手術衣の下に何も身に着けていないレナテは裸の下半身を晒け出したくなかったので、泣き叫びながら必死に抗っていた。しかし、今や、徹底的に動きを封じられた彼女はいかなる抵抗もできず、私たちのなすがままだった。

さらに手術する前に、その部分を剃毛する必要があった。その処置にシェービングクリームと剃刀を使うと、ほとんどの患者が性的な興奮を示すことが判明している。これは、この後に行う手術において非常に有効だった。

レナテも剃刀が陰毛を剃り落としている間中、ずっと艶めかしい喘ぎ声を漏らし続けていた。そして、ブラカップの丸く切り取られた穴から覗く乳首も堅く尖らせていた。アニータが熱いタオルで残った泡を拭うと、無毛となった外性器が露わになった。

手術前の処置を終えたアニータは白衣を捲り上げて、レナテに修正を施された自身の下半身を見せた。それは、彼女が自ら望んだ結果ではなく、妊娠中絶の代価として、私が行ったものだった。

アニータは黒人男性と性的な関係を結んだことで妊娠してしまったが、その子どもを産みたくはなかったのだ。私は、彼女に全身麻酔を施して胎児を子宮もろとも摘出した。さらに数週後には陰核切

除を含む完全な割礼と陰門封鎖も施した。そのときは、麻酔を使わずに、彼女のあげる悲鳴を大いに楽しんだ。

かつては、陰核と小陰唇があったはずの場所で、まっすぐ縦に走る白い傷跡を見せつけられたレナテは、その目を大きく見開いて身震いし始めた。彼女の伯父もアニータの鼠蹊部を覗き込み、姪の股間とを見比べながら呟いた。

「ずいぶんと見た目が変わるものだな」

「きみの姪御さんも傷が癒えれば、こんなふうに綺麗な見映えになるさ」

私が冗談っぽく友人に言い返すと、レナテは泣き喚き始めた。守れもしない約束事を次々に並べ立てて見境もなく嘆願する姿には呆れるどころか、不快の念を抱かされた。私は割礼手術前の恒例行事をアニータに指示した。

「じゃ、いつもどおりに頼むよ」

おもむろに、アニータは患者の太腿の間に屈み込み、未だ剃毛による性的興奮から醒めやらない外性器を舐め始めた。私のクリニックの受付嬢兼看護師は、その行為にとても熟練していてた。性感を高めるために、あらゆる手管を駆使された年若い女性は、たちまち快感の大波が押し寄せてきて、断続的な喘ぎ声を漏らし始める。そして、しばらくすると、レナテは大きな叫びを発して人生最後のオルガスムに達した。

私は丸椅子と手術用具類が並べられているトレイを卓上に載せた台車を診察台の前に置くと、その椅子に腰を下ろしてリモコンのスイッチを操作した。すると、レナテを乗せた診察台はモーター音を響かせて、ゆっくりと後方へ傾き、股間を大きく広げたままの状態で下半身を持ち上げた。

今、私の目前に晒されている性器は異常発達を遂げた幼女のもののような外見をしていた。無毛の割れ目を形作る左右の柔肉は火照ったように赤みを帯びて膨れ上がり、その間では細長い萼から天を突くように立ち上がっている薄桃色の肉芽があからさまにその姿を覗

かせていた。
　私は左右の大陰唇をそれぞれ鉗子で挟んで陰裂を大きく広げると、晒けだされた尿道口へ導尿カテーテルを挿入した。これは手術中の排尿管理だけが目的ではなく、ステンレス製の鋭い刃が陰核の付け根を抉るとき、傍にある尿道を傷つけないようにするためでもあった。それから、殺菌剤を含ませた脱脂綿で快楽の余韻に浸っている熟れた肉の隅々までを拭いていく。その敏感な箇所に冷水を浴びせられたような感覚にレナテが小さな呻き声を漏らす。
　これで割礼手術の準備はすべて整った。手術中、要所要所で写真を撮ることになっているアニータもカメラを手にして後方に控えていた。
「では、始めるとしようか」
　私が隣にいる友人に告げると、レナテが必死に嘆願する。
「お願いよ。手術だけは許して！　もう絶対に悪いことはしないから！！」
「もう手遅れなんだ、レナテ。おまえは、私たちとの約束をさんざん破ってきただろう？　これは自業自得なんだ。――さあ、やってくれ、ジョージ！」
　伯父から最後通牒を告げられたレナテは診察台から逃れようと試みたが、しっかりと固縛されている体はまったく動かせず、無駄な足掻きに終わった。
「やめてーっ！」
　泣き叫ぶ少女を黙殺すると、私は左手で細長い鉗子を取り上げて陰核包皮を引っ張り上げた。それから、鋭利な外科用鋏を右手に持つと、その左右を無造作にカットした。レナテは二度にわたる切断の激痛から甲高い悲鳴を発したが、私はなんら躊躇することなく、千切れかかっている薄皮を手にした鉗子でもって強引に引き剥がし、腎臓皿の中へ放り込んだ。
　今や、切除すべき器官へのアクセスは容易となり、剥き出しになったその肉真珠に手術糸をきつく結びつけることも簡単にできた。

その作業の結果を確認するため、レナテが絶叫するまで、私は手術糸の末端を可能な限り引っぱり上げてみる。そして、その糸を手放すと、長く引き伸ばされていた肉芽は勢いよく跳ね戻った。
それに満足した私は外科用鋏を再び手にすると、右側の小陰唇を鉗子で引っぱりながら、その付け根で下方から上方へと切り進めた。刃先を閉じ合わせる度に、レナテが全身を激しく震わせて泣き喚く。
「いやああーっ！」
そのまま、小陰唇の上端まで切り進むが、それを亀頭部から完全に切り離すことはせず、陰核小帯で繋がったままで保つ。これは手術の手順による理由からではなく、患者から摘出した“もの”の保存瓶内での見映えを重んじたからだ。同じようにして左側の小陰唇も切り終える。
「ううっ……痛い……。も…、もう許して……。もう……切らないで……」
いよいよ、レナテに対する割礼手術は、そのクライマックスを迎えるところだ。次は陰核本体の摘出だ。
十九世紀末に、イギリス人の婦人科医――アイザック・ベーカー・ブラウンによって確立された女性の性欲異常亢進症と常習的な自慰癖を治療するための外科的な療法――陰核切除術は女性の外性器に存在する性感覚の中枢を完全に根絶することを意味していた。それを行えば、患者は二度と性的な快楽を感じることはないのだ。
私は陰核亀頭に結びつけた手術糸を左手で持つと、それを軽く引っぱり上げながら、真っ赤に充血している肉芽の付け根へ外科用メスを突き立てた。
「いっぎゃああーっ！！」
その瞬間、レナテは、これまで以上に大きな悲鳴――まるで獣の断末魔のような絶叫を張り上げて、再び診察台から逃れようと激しく藻掻いた。
この陰核切除術は、本来ならば、最低でも局部麻酔が必要とされるレベルの外科手術だ。しかし、悪癖の矯正という目的から、患者

本人に多大な苦痛を経験させるために無麻酔で行わなければならないというのがブラウン博士の主張だった。その考え方には、私も自身の経験則から賛同している。

　私は外科用メスの切っ先を環状にぐるりと動かして、充血している陰核亀頭を周囲の皮膚から完全に自由にした。さらに糸を上方に手繰りながら、薄膜に包まれている勃起性組織の周りをも慎重に切り進めていくと、芋虫状の器官が少しずつ体外へと引き出されてくる。おかげで、その下方から恥骨上部へと繋がる陰核堤靱帯を確認することができた。

　右手の外科用メスをまたもや外科用鋏に持ち替えると、その繊維組織の付け根に刃をあてがい、刃先を無造作に閉じ合わせた。その瞬間、鈍い断裂音が室内に響きわたる。そして、完全に自由になった陰核体を手術糸で引っぱり上げると、陰核脚の二股に分岐した部分が切開部から露出した。

　すかさず、アニータがカメラのストロボを光らせて、そのクローズアップを数枚、角度を変えて撮影する。これらの写真も標本と共に残す貴重な資料となるのだ。

　私は外科用鋏を置くと、今度はまっすぐな刃を持つ、やや長めの特殊な外科用メスを取り上げた。その切っ先を切開部から差し込んで、薄い筋膜に覆われた肉根から海綿体組織を慎重に、そして、その苦痛が長引くように時間をかけて切り出していく。

「グ＄◇ギ♯ア＆▽ヽ――＊！　ヴ△ガ％※ア○￥々――――α！！」

　大きく頭を振って悶え苦しむレナテがあげ続ける人間離れした絶叫も、この陰核切除術が核心部へと迫っていることを明確に告げていた。

　左右の陰核脚を恥骨弓からほとんど剥離し終えたと確信した私は、今度は細長い外科用鋏を取り上げた。次は勃起性組織に血液を供給している陰核背動脈と性中枢に快感を伝達する陰核背神経の切断だ。それらは陰核体が陰核脚に分岐する辺りの左右に、それぞれ並列し

て走っている。
　この陰核背動脈と陰核背神経の切断は、性的快楽の中枢器官に対して致命的なダメージを与えるものであり、まず、それを右側で為した瞬間、レナテは堪え難い激痛から、ほとんど意味をなさない呻き声を発し、口から血まみれの泡を吹き零して意識を手放してしまった。すべての処置を終える前に患者が失神してしまったことに落胆しつつも、私は粛々と手術を続け、左側をも切断した。
　私は最後に今一度、陰核亀頭に結ばれている手術糸を引っぱり上げると、限界まで引き伸ばした陰核脚の基部に外科用鋏の刃先をあてがい、それから、それを断ち切った。さらにもう一方も……。そして、そのまま、手術糸を保持している左手を上げていくと、快楽器官の一切合切が、ずるりという擬音を発するような感じで切開部から抜け出てきた。
　持ち上げた手術糸の末端には短い肉襞と細長い肉根を二つずつ備えた少女のミニペニスがゆらゆらと揺れながらからぶら下がり、その下に真っ赤な血を滴り落としていた。私は先端部に結ばれている手術糸を丁寧に解くと、その戦利品をよく洗ってから保存液を満たした瓶の中に入れて、台車上にあるトレイに置いた。
　今や、レナテの外性器は大陰唇の内側にあったものをすべて失っていた。陰門上部に丸く開口する傷口からは真っ赤な血を溢れさせている。私は血管を結紮して止血すると、陰核を摘出した円形の切開部を手術糸で丁寧に縫い合わせた。
　それから、左右の大陰唇に付けていた鉗子を取り外すと、陰裂の内側部分に沿って皮膚を薄く剥ぎ取っていく。その処置によって目覚めたレナテが、苦痛に満ちた悲鳴を再び漏らし始める。
「あぁーっ……。お…、お願いよ……。もう……、これ以上は切らないで……」
　私は血が滲む大陰唇の縁を寄せて合わせると、その縫合部が癒着した後に小さな開口部が残るようにするため、導尿カテーテルを挿したまま縫い合わせていく。外科用の針が柔肉を貫く度に、まるで

串刺しにされたかのように、レナテは全身を激しくひきつらせて泣き喚いていた。
「よし、これで終わりだ」
レナテの自慰癖に対する外科的な治療は、何らの問題もなく終えることができた。今回の割礼手術も毎度のことながら完璧な仕上がりで、私は友人に対する面目を十分に保つことができるだろう。そして、縫い合わされた傷が完全に癒えれば、そこはアニータと同じ見映えになるはずだ。

エピローグ

それから、十日後――傷が癒えて、ある程度歩けるようになったレナテは、クリニックを退院していった。
その後、レナテは優秀な成績で高校を卒業し、大学の医学部へと進学した。そして、婦人科医になった彼女は一九七五年に、私のクリニックを引き継いだ。
レナテ自らが最初に行った特別な手術の患者は、母親と伯母だった。もちろん、伯父――私の友人は自分の妻と義妹に完璧な切除術が施される場に立ち会っていた。彼は妻を密かに望んでいた性奴隷へと貶めたことに大いに満足し、その傷が回復するのが待ち切れないようだった。
さらに、レナテは少年や男性の去勢手術をも行った。その際、切り取った陰嚢から小さな革製バッグを、陰茎から皮膚を剥いで革製ジャケットを作ったりしていた――だが、これはまた別な話だ。